Here Now Bestopia
ベストピア Bestopia
第410号
2021年4月号
パリ通信
第112号

文化遺産を維持する

パリ通信4月号の概要・続・アジール・フロッタンの再建
パリ通信の筆者古賀順子さんは昨年10月19日再浮上から半年。年末年始2週間の帰省を除き、一日も欠かさず船の監視に通っています。日本とフランスの民間ベースの文化交流の一環として日本側は公益財団法人・国際文化会館が支援しています。現地の通訳や諸活動を支えているのが古賀さんです。建築設計関係の方のみならず広く文化歴史の伝播に関心のある方の協力をお願い致します。詳しくは上記法人のホームページを参照ください。
ノートルダム大聖堂の修復工事も続いています（小原靖夫記）

パリ通信第112号

4月15日、パリ・ノートルダム大聖堂の火災から丁度2年が過ぎた。夜中遅くまで燃え上がっていた火の粉を覚えている。尖塔の修復のために組んだ工事現場のパイプが焼けただれ、解体に長い時間がかかった。脆くなった窓枠やオジーブには木製の支えが設置され、大きく穴が空いた屋根に覆いがかけられ、聖堂内に新たな足場が組まれた。鉛の屋根が燃えた際に拡散した粉塵が引き起こす鉛中毒対策は、今も工事に大きなブレーキをかけている。大規模で危険を伴う修復工事だが、屋根を支える木組みの樫の木が伐採され始めた。入念に選別された樹齢200-300年の原木を切り出し、これから1-2年乾燥させて、鉛の屋根を支える1300本の木組みを造り直すのである。現代的な塔に建て替える、ガラスやコンクリートを使うなどいくつものプロジェクトが提案されたが、火災前と同じ形に復元されることが決まった。世界中から集まった寄付金で、いくらかかっても修復工事資金に困ることはない。850年を超える歴史を存続させることと資金を天秤にかけることは論外である。

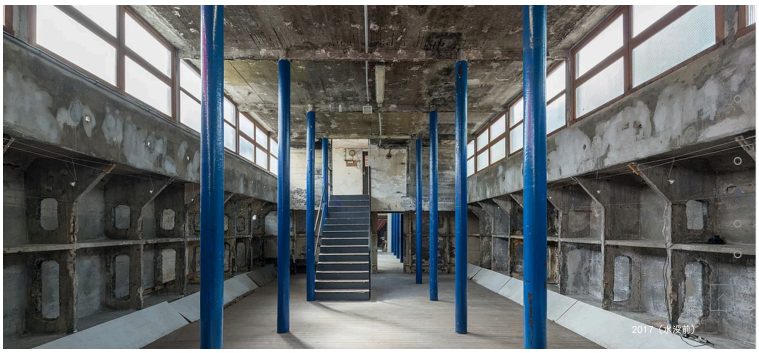
そのノートルダム大聖堂から1,5km上流にある「ルイーズ・カトリーヌ号(別名アジール・フロッタン)」はノートルダム大聖堂のような国宝級の価値はないが、フランスの歴史を物語る文化財である。

昨年10月19日再浮上から半年。年末年始2週間の帰省を除き、一日も欠かさず船の監視に通っている。亀裂からの水漏れをポンプアップし、物が盗まれたり壊されたりしないように、浮浪者が入り込まないように監視する毎日である。

浮上後のコンクリートと鉄筋の調査、鉛やアスベスト調査、修復・復元の可能性が調査され、再生プロジェクトの見積もりとともに最終報告書を待つ段階になった。ル・コルビュジエが1929年から1931年にかけて改造した鉄筋コンクリートの平底船。予想していたとは言え、修復・復元費用は高額になりそうだ。仮の見積もりではあるが、1億や2億円で

白黒写真 ©FOUNDATION LE CORBUSIER / カラー写真 ©スターリン・エルメンドルフ

済む話ではない。百年経って老朽化したコンクリート船、一般の人を収容できる船に生まれ変わるには数億円の資金が必要だという。さらに船を維持していく資金も考慮しなければならず、文化遺産を維持することがいかに大変かを実感している。
そもそもコンクリートで船が造られたのは19世紀後半から20世紀前半にかけての数十年のことである。鉄が不足し、その代わりに安く入手できる材料としてコンクリートが使われた。簡単に安くできるのが利点だが、柔軟性と防水性に劣り、海水に弱く、硬いものや強い衝撃に耐えられない、重いのでスピードは出せないなどの理由でコンクリート船は造られなくなった。「ルイーズ・カトリーヌ号」は一世を風靡し、短いブームで終わったコンクリート造船技術を今に伝える貴重な存在である。
しかし、3年近く沈んだままの船の鉄筋は腐食し、家具や木工品、付属品は全て無くなり、水平連続窓もほとんど残っていない。備え付けの家具やベッドはル・コルビュジエ建築の大きな特徴である。今あるのは「リエージュ号」(1919年から1929年まで屋根も柱も窓もなく、石炭を運搬していた時代)の船体と付け加えられたル・コルビュジエの柱だけが残っている状態だ。直径17cm(円周55cm)の36本の柱。華奢で繊細で均整の取れた美しい柱だと思う。何度も塗り直されたペンキの層だけが90年の時間を具現化している。薄いダークブルー、パステルブルー、ブルーマリン、緑、茶色など何層もの色がある。そのペンキ層も今やどんどん剥がれ落ち、コンクリートの地肌がむき出しになる日も遠くないだろう。当時は問題にならなかった塗料の鉛、柱の内部に使われたアスベスト・ファイバーだが、今日の安全規格をクリアするための費用は高額に上る。1000平方メートルのコンクリートを修理、補強しなければならない。資金面だけで言えば修復するより新たに造り直す方が安いことになる。資金と修復を天秤にかけながら、どのようにプロジェクトを進めるか難しい選択に迫られるだろう。コロナ禍の都市封鎖が続く中、川に沿って船まで歩く道すがらに船の運命を思う。以上



右は完成イメージ
写真はいずれも公益財団法人国際文化会館のホームページから小原靖夫が転写しました。